

弥生開始期の集団関係

古河内潟沿岸の場合

Interaction between the Jomon Farmer and the Yayoi Farmer
in the Beginning of the Yayoi Period along the Old Kawachi Lake

藤尾慎一郎

FUJIO Shin'ichiro

はじめに

①問題の所在

②共存期の確認—長原式新とI-1-古—

③炭素14年代の導入

④近畿における弥生稲作開始期の特質

おわりに

【論文要旨】

本稿は、水田稲作が大阪平野でどのように始まったのか、そのプロセスやメカニズムを、ヨーロッパ先史考古学のフロンティア理論を用いて考えたものである。30年ほど前からこの地域における水田稲作の開始問題を論ずる場合には二つの大きな考え方があった。一つは本地域の西方から水田稲作民がやってきて入植し、もともと住んでいた在来の採集狩猟民である近畿縄文人と共存して、その中で交流が始まって水田稲作が広まったという「移住説・外来説」「住み分け説」と、近畿縄文人が水田稲作の技術を受け入れて、農耕民に転換していったという「自生説」である。この二つの解釈の根拠は、地元の人びとが使うと仮定された縄文系土器と、西方からやって来た人びとが使うと仮定された遠賀川系土器との関係にある。すなわち両者が同時に存在していたのか、それとも時期差なのかという点である。大阪平野では二つの土器群が確実に共存する遺構がほとんど知られていないので、これまで同時存在なのか時期差なのか決め手に欠ける状況が続いていた。

本稿では、二つの土器群に付着する炭化物の炭素14年代値をもとに算出した土器群の較正暦年代を使って比較したところ、二つの土器群の一部が同時に存在していたことがわかった。その期間は100～150年にも達する。しかもこの期間の水田は定型化した灌漑施設をもつものではなく、土器自体も弥生土器として定型化する前の段階にあたることから、縄文社会が水田稲作を始めてから弥生社会へと転換するための準備期間に相当し、定型化するまで100～150年を要したことを意味している。

このように縄文文化的な特徴が色濃く残る大阪平野の弥生I期前葉は、少数のニューカマーと多数のネイティブとの接触交流によって、ニューカマーのもつ文化に100年以上かかって地域全体が統合されていくというフロンティア理論に近いことがわかった。水田稲作が始まるやいなやきわめて短期間のうちにコメの生産量を増大し、社会が急速に発展したという従来の説明とはほど遠い状況だったことを明らかにした。

【キーワード】 相互交流モデル、在来人、長原式土器、遠賀川系土器、古河内潟、近畿、弥生